新年礼拝

2024年1月7日（日）

題 「神の小羊」

テキスト：ヨハネによる福音書1章29～34節

皆さん、おはようございます。

クリスマスの光に包まれて2024年の新年礼拝に集えました事をうれしく神さまに感謝します。皆さまとご家族の上に神さまの平安をお祈りいたします。

この時、マザーテレサの言葉を思い出します。

以前お伝えしたこともあるんですが、新しい歩みにとっても、ふさわしい言葉ではないかと思えます。

「思考に気をつけなさい、それはいつか言葉になるから。言葉に気をつけなさい、それはいつか行動になるから。行動に気をつけなさい、それはいつか習慣になるから。習慣に気をつけなさい、それはいつか性格になるから。性格に気をつけなさい、それはいつか運命になるから。」今日の週報にも記していますので、時々思い返してみるのも良いと思えます。

さて、

新しい年を歩み出すためにも今日の聖書の言葉に共に聞きたいと願います。

今日の聖書の個所の小見出しには「神の小羊」とつけられています。

「神の小羊」、「小羊」とは、あいらしいですが、古代イスラエルでは、神に対する人間の罪を贖うため、赦しを求めるために、動物の小羊や牛、ヤギなどが犠牲として神に捧げられていたのです。しかし、旧約聖書のイザヤ書53章では、小羊は「苦難のしもべ」姿として描かれています。これが新約聖書の中では、神の愛された独り子であるイエスを示すことばとなっているのです。

今日の聖書の個所には、主イエスの来られることを人々に伝えた洗礼者ヨハネが出て来ます。

今日の少し前の聖書の個所ヨハネによる福音書1章19節には、ヨルダン側で洗礼者ヨハネが自分の所に来た人々にヨルダン川での水で洗礼を授けていたことが記されています。ヨハネの行動を知った、ユダヤ人たちや祭司たちがにユダヤの中心の町エルサレムからヨハネのもとに来たのです。ヨハネの言葉や行動の調査に来たと言ってよいと思えます。

人々は洗礼者ヨハネに問い直すような感じで「あなたは、どなたですか？」と聞いたのです。どうしてこのようなことをするのか！と言わんばかりにです。

それに対してヨハネは「私はメシア」つまり「救い主」ではないと答えました。

ぞれではお前は一体何者かとヨハネは問い詰められます。

そこで、翌日ヨハネは、イエスが自分の所へ来るのを見て、力強く語り出したのです。それが今日の場面です。

◆神の小羊

29:その翌日、ヨハネは、自分の方へイエスが来られるのを見て言った。

「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ。

エルサレムから取り調べに洗礼者ヨハネの所に来た人々が、翌日、イエスがヨハネの所に来るのを見て、言ったのです。ここに「見よ」という言葉があります。今日の個所に何度も出て来ています。ヨハネが確信を持って、聞く人に注意を促す言葉です。ヨハネにとって、イエスは、「世の罪を取り除く神の小羊」なのです。そう確信して宣言しているのです。罪とは、ギリシア語で「ハマルティア」と言われ、単に悪いことをしたということではなく、その意味は「的はずれ」ということです。放たれた弓矢が的に向かわずにとんでもない方向に飛んでいる状態だと言われます。

神に創られた人間が、神の方に心の目を向けず違う方向に向けている状態です。イエスはそれを正すために神の元から来られた方なのです。憐み深い神が愛する子イエスを備えられたのです。ヨハネによる福音書3章16節に「神はその独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」とある通りです。

イエスはご自身を捧げることによって動物犠牲を廃止されたのです。これは聖書によれば、イエスのご意思でもあり、神さまの心、思い、計画でもあったのです。それゆえ、人がイエスに心の目を向けるならそれ以外の犠牲を捧げる必要はないということなのです。

ここに神さまの憐れみがあり、イエスの十字架の服従によって、わたしたち人間に自由と救いが与えられたのです。もう救われるために動物犠牲は必要なくなったのです。ヨハネは語ります。

30:『わたしの後から一人の人が来られる。その方はわたしにまさる。

わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、こ

の方のことである。ヨハネは、救い主であるイエスは自分よりも勝っていることを認めています。ヨハネの謙虚な姿です。そして、救い主であるキリストは、自分よりの先におられたのだと証言しているのです。そのようにヨハネは理解し、人々に語っていたのです。ヨハネを祭り上げようとする人々、または批判する人々に、その方は、つまりイエス・キリストはわたしにまさっているのだと語ったのです。謙虚なヨハネの心が、証人としてのヨハネの姿がここにあります。

そして、自分の周りに集まって来た人々に、

「31:わたしはこの方を知らなかった。しかし、この方がイスラエルに現れるために、わたしは、水で洗礼を授けに来た。」と告げたのです。ヨハネは自分はイエスを指し示す一本の指だと理解していたのです。西洋にはその事を示す、イエスを指し示しているヨハネの有名な絵画があります。

32:そしてヨハネは証した。「わたしは、“霊”が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを見た、とあります。

つまり、神の霊がイエスにとどまっているとの証です。霊とは、神の力であり、霊は、「風とか命の息」ということを表しているのです。イエスは、このヨハネから洗礼を受けられましたが、その時、神さまの愛の霊に包まれ、命の息吹を持つ方とされたのです。わたしたちもイエスに心つながることによって、あるがままで神の愛に柔らかく、あたたかく包まれている状態にさせてもらえるのです。ヨハネは語っています。

33:わたしはこの方を知らなかった。しかし、水で洗礼を授けるためにわたしをお遣わしになった方が、『“霊”が降って、ある人にとどまるのを見たら、その人が、聖霊によって洗礼を授ける人である』とわたしに言われた。

ヨハネは、神から救い主イエスを伝えるためにこの世に遣わされたのだと自覚していたのです。

34:わたしはそれを見た。だから、この方こそ神の子であると証したのである。」見るという言葉が繰り返し出て来ることに気づきます。

しっかりイエスを見た人は、イエスを自分の心に迎えた人は、すでにイエスに出会っているのだと言えるでしょう。

ここに「見る」との言葉の重さがあります。イエスを見た人ヨハネはイエスこそ、神の子であるのだと証しする者とされて神によって用いられて行ったのです。

イエス・キリストを指し示す「一本の指」であるヨハネ、キリスト教会は、またキリストにつながる私たち一人一人、イエス・キリストの愛の中に留まり続けて、イエスの愛を伝える働きを担って行く群れとして今年も歩みたいと願います。

皆さまの上に、主の平安を祈ります。